

来春の完成を目指し、戦前の姿へ復元工事中の国指定重要文化財「東京駅丸の内駅舎」。その屋根に使う宮城県産の天然スレート(粘板岩を薄く割った板)が、東日本大震災の津波にのみ込まれて散乱した。屋根の修復に携わる同県石巻市の職人たちは、自宅や会社を流されながら、汚泥と、がれきの中から必死にスレートを拾い集めた。被災で契約解除の危機に直面したが、職人たちの気概に心をよそと支援の輪が広がり、JR東日本も前向きに検討を始めた。

(出田阿生、井上圭子)

# 東京駅の屋根 何よりも先に

「何もかも、おっほっの社員全員で集めた。だって東京駅の屋根だよ。辰野金吾先生(駅舎を設計した明治時代の代表的建築家)が命懸けでつくった駅舎だよ。家も会社も津波で流れたけど、とにかく、仕事が先だった」

石巻市北上町の屋根工事専門「熊谷産業」の熊谷秋雄社長(右)は、こう話す。津波の水が残った海のように田んぼの前に、ぼつんと立つプレハブ小屋が現在の「社屋」だ。社名が書かれた看板が見つかり、正面に掛けている。

## 東日本大震災 津波で流出

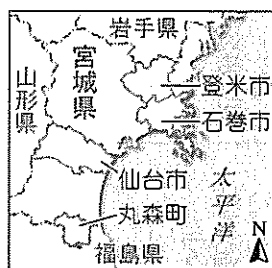
「何もかも、おっほっの社員全員で集めた。だって東京駅の屋根だよ。辰野金吾先生(駅舎を設計した明治時代の代表的建築家)が命懸けでつくった駅舎だよ。家も会社も津波で流れたけど、とにかく、仕事が先だった」

石巻市北上町の屋根工事専門「熊谷産業」の熊谷秋雄社長(右)は、こう話す。津波の水が残った海のように田んぼの前に、ぼつんと立つプレハブ小屋が現在の「社屋」だ。社名が書かれた看板が見つかり、正面に掛けている。



被災した職人たちが懸命に集めた東京駅舎のスレート。泥を洗い落とし元の姿にする=10日、宮城県石巻市で

### 宮城 工事会社 スレート回収



は全責無事だった。津波から十日ほど海水があがる程度、ひどく、すぐにスレートの回収に取りかかった。「災害復旧作業で、がれき撤去の重機が入れば、割れてしまう」と、広島県出身の職人で工事課長の沖元太一さん(左)は、熊谷さんをはじめ社員総出で、泥やがれき

に埋まったスレートを一枚一枚で掘り出した。保管していた約六万五千枚のうち、約四万五千枚を二週間かけて回収した。熊谷さんは報告書をまとめ、今月八日に駅舎工事をお願いする共同企業体に提出。するとJR東日本の意向として「被災の需要が激減した際、あえて時代に逆行して茅葺き職人を養成。中尊寺岩手県)や兼六園(金沢市)など全国各地の文化財の修復・保存を担った。さらに熊谷さんは、地元で採掘され、屋根や壁に使われる天然スレートに着目。減る一方のスレート職人の養成を始め、旧役場などの歴史的建造物でスレート屋根の保存や活用に乗り出した。いま津波で何もかも流された地元を、茅葺きとスレートの里」として復興できないかと考えている。

「仮設住宅のプレハブは、いずれ壊され、資源が無駄になる。最初から国が茅葺きやスレート葺きで住宅を建て、被災者に貸し出し、二十年后に買い取ってもらうのはどうか。さらに「津波を乗り越えたスレート一枚につき二千円ほどの寄付をいただき、東北へのメッセージと名前を書いてもらい、それを東京駅の屋根に載せよう」と提案する。

## 特報

がれきや海水が残り、被災地の被災地から事務所の発を=14日、石巻市で

## 「復興のシンボルへ」

十日上京した熊谷さんから相談を受け「その義侠心に味方しないわけにはいかない」と立ち上がったのが、地域雑誌「谷中・根津・千駄木」編集人として作家の森まゆみさん(左)だ。

森さんは、約二十四年前に発足した「赤レンガの東京駅を愛する市民の会」代表委員の一人として丸の内駅舎保存運動の先頭に立ってきた。署名活動を通じて、屋根材産地の熊谷さんと出会った。東京駅の屋根を葺くことに誇りを持っていた雄勝や登米の人々から当時、山ほどの署名をもらった。森さんの父方の祖父が宮城県丸森町出身だ

東京駅丸の内駅舎は、2階建て(一部3階建て)で、屋根は寄せ棟型。2006年、東京都千代田区



「宮城はもう一つの故郷。熊谷さんの苦しみは、人ごとじゃない」「JRの全面広告で東北復興に全力を注ぐ」と言うが、高い宣伝費をかけるより津波で泥だらけになったスレートを洗って使う方が東北の人々の力になる」と川大名教授。

森さんら「愛する会」は十五日、署名と要望書をJR東日本に提出し、ちい「愛する会」メンバーの主要メンバー、多見貞子さん(左)は「JR東日本も被災者。けんか腰ではなく、メールを送りたかった」として、文末に「御社とともに東日本復興の力になりたい」との一文を添えた。

## 復元への使用 文化人ら後押し

JR東日本広報部は、スペイン産のスレートに変える方針について「うちとしてはスペイン産を使うと伝えたことはない。共同企業体が何と云ったかは知らない」と話す。一方で「これから現地の被害程度などを精査する」として、被災したスレートの使用に前向きな姿勢を示した。現地調査に向けて日程調整に入ったという。

「愛する会」事務局長で、東京芸術大名教授(文化財保存計画)の前野寛さん(左)は「東京駅は、ただの駅じゃない。歴史もあり、国寶があの駅から馬車に乗って皇居へ入るといふ外交的な意味を持つ重要文化財。修復には元の材料を使うのが条件で、これは守らなければならない」と話す。

# 執念の4万5000枚

越えた東北のものを、ぜひ使ってほしい」と、熊谷さんが切実に願うのは、過疎化が進む地元を再生したい思いで長年活動してきたからだ。

熊谷さんは父で会長の貞好さん(左)と、戦後の経済成長期に茅葺き屋根の需要が激減した際、あえて時代に逆行して茅葺き職人を養成。中尊寺岩手県)や兼六園(金沢市)など全国各地の文化財の修復・保存を担った。さらに熊谷さんは、地元で採掘され、屋根や壁に使われる天然スレートに着目。減る一方のスレート職人の養成を始め、旧役場などの歴史的建造物でスレート屋根の保存や活用に乗り出した。いま津波で何もかも流された地元を、茅葺きとスレートの里」として復興できないかと考えている。